

5 飼料作物

(1) 飼料用米

ア 飼料用米（専用品種・移植栽培）

専用品種は、収量性・耐倒伏性に優れ飼料用米生産に適した特性を持っている。

水田の地力維持・向上のため完熟たい肥等の施用や生わらのすき込みを行う。なお、生わらのすき込みは気温が高いうちに行い、土壌中での腐熟を促進する。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。収量向上を図るため多肥栽培を行い葉色を濃くするが、飼料の品質確保と作業の効率化のため倒伏しないよう注意が必要である。

病虫害防除では、主食用米に比べ使用できる薬剤の種類と時期が限られているため注意する。このため温湯種子消毒や定期的な除草などの病虫害発生抑制の耕種的技術に取り組むことが重要である。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 8.0kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 9回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から移植までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○移植後、速やかに本田の取り置き苗を処分する。 ○健苗の育成、適期移植により初期生育の確保に努める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○農薬は飼料用米の生産・給与技術マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ 飼料用米（専用品種・湛水直播栽培）

専用品種は、収量性・耐倒伏性に優れ飼料用米生産に適した特性を持っている。直播栽培は省力・低コスト効果の高い栽培法である一方、収量に影響の大きい出芽・初期生育の安定確保や適切な雑草防除に注意が必要である。

水田の地力維持・向上のため完熟たい肥等の施用や生わらのすき込みを行う。なお、生わらのすき込みは気温が高いうちに実施し、土壌中での腐熟を促進する。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。収量向上を図るため多肥栽培を行い葉色を濃くするが、飼料の品質確保と作業の効率化のため倒伏しないよう注意が必要である。

病虫害防除では、主食用米に比べ使用できる薬剤の種類と時期が限られているため注意する。このため温湯種子消毒や定期的な除草などの病虫害発生抑制の耕種的技術に取り組むことが重要である。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○生わらを、秋に規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 8.0kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 11回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から播種までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○種子の加温処理、適期播種により出芽・苗立ちの促進に努める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○農薬は飼料用米の生産・給与技術マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(2) 稲ホールクロップサイレージ（以下、稲WCS）

ア 稲WCS（専用品種・移植栽培）

専用品種は、収量性、耐倒伏性に優れ、茎葉を含めた地上部の収量が重視される稲WCSに適した特性を持っている。移植栽培は気象による収量の変動が少なく、雑草防除も容易であることから、収量・品質の面で安定的な生産方法である。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。地上部全体の収量向上を図るため多肥栽培を行い、葉色を濃くする。稲WCSを利用する畜産農家で生産された家畜ふんたい肥等の利用により地力窒素の向上に努めるとともに、地域内の有機性資源循環を図ることが望ましい。

病虫害防除では、抵抗性品種を選択して低コストな防除に努める。主食用米に比べ、使用できる薬剤の種類や使用時期が限られているため、温湯種子消毒や定期的な除草などの病虫害発生抑制技術に取り組むことが重要である。

除草では除草剤を節減するため以下の除草技術を実施する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 完熟たい肥を施用する。 ○ 緑肥作物を栽培・施用する。 ○ 麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壤改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 肥効調節型肥料を施用する。 ○ 有機質肥料を施用する。 ○ 局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 分量 9.6kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○ 除草用動物を利用する。 ○ 機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○ 温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○ 土壤診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○ たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○ 代かき後から移植までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○ 水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○ 移植後、速やかに本田の取り置き苗を処分する。 ○ 健苗の育成、適期移植により初期生育の確保に努める。 ○ 必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○ 農薬は稲発酵粗飼料生産・給与マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

イ 稲WCS（専用品種・湛水直播栽培）

専用品種は、収量性・耐倒伏性に優れ、茎葉を含めた地上部の収量が重視されるWCSに適した特性を持っている。直播栽培は省力・低コスト効果の高い栽培法である一方、出芽・初期成育の安定確保や雑草防除に注意が必要である。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。地上部全体の収量向上を図るため多肥栽培を行い、葉色を濃くする。稲WCSを利用する畜産農家で生産された家畜ふんたい肥等の利用により地力窒素の向上に努めるとともに、地域内の有機性資源循環を図ることが望ましい。

病虫害防除では、抵抗性品種を選択して低コストな防除に努める。主食用米に比べ、使用できる薬剤の種類や使用時期が限られているため、温湯種子消毒や定期的な除草などの病虫害発生抑制技術に取り組むことが重要である。

除草では除草剤を節減するため以下の除草技術を実施する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 7.2kg/10a以下
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から播種までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○農薬は稲発酵粗飼料生産・給与マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

ウ 稲WCS（主食用品種・移植栽培・平坦地域）

本地域は灰色低地土が多い地帯である。また、気象変動が大きく、収量・品質が変動しやすいことから、土壌診断に基づいた施肥や堆肥の施用を行い、地力を維持・向上させ、気象変動に強い安定的な稲WCS生産を進める。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。食味に関係なく地上部全体の収量向上を図るが、飼料の品質確保と作業の効率化ため、倒伏しないよう注意が必要である。稲WCSを利用する畜産農家で生産された家畜ふんたい肥等の利用により地力窒素の向上に努めると共に、地域内の有機性資源循環を図ることが望ましい。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類の耕種的防除を励行する。

除草では除草剤を節減するため以下の除草技術を実施する。また、適期移植に努めるとともに、代かき後から移植までの期間をできるだけ短くするなど、除草剤の効率的利用により雑草の発生を抑える。主食用に供する場合に比べ、使用できる薬剤の種類や使用時期が限られているため注意する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 4.8kg/10a以下* 6.4kg/10a以下* *
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から移植までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○健苗の育成、適期移植により初期成育の確保に努める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○農薬は稲発酵粗飼料生産・給与マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*コシヒカリに準ずる品種等、**ひとめぼれに準ずる品種等

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

エ 稲WCS（主食用品種・移植栽培・山間・山沿い地域）

本地域は生育初期の気温・水温が低く、生育量の確保が困難で、収量が低下しやすい地域である。さらに、病害虫の発生も多く、品質が低下しやすいことから、土壌診断に基づいた施肥や堆肥の施用を行い、地力を維持・向上させ、気象変動に強い安定的な稲WCS生産を進める。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。食味に関係なく地上部全体の収量向上を図るが、飼料の品質確保と作業の効率化ため、倒伏しないよう注意が必要である。稲WCSを利用する畜産農家で生産された家畜ふんたい肥等の利用により地力窒素の向上に努めると共に、地域内の有機性資源循環を図ることが望ましい。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類の耕種的防除を励行する。

除草では除草剤を節減するため以下の除草技術を実施する。また、適期移植に努めるとともに、代かき後から移植までの期間をできるだけ短くするなど、除草剤の効率的利用により雑草の発生を抑える。主食用に供する場合に比べ、使用できる薬剤の種類や使用時期が限られているため注意する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 7.2kg/10a以下* 9.6kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○マルチ栽培を行う。（対象：雑草） ○温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から移植までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○健苗の育成、適期移植により初期成育の確保に努める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○農薬は稲発酵粗飼料生産・給与マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*ひとめぼれに準ずる品種等、**まいひめに準ずる品種等

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

オ 稲WCS（主食用品種・湛水直播栽培・平坦地域）

本地域は灰色低地土が多い地帯である。また、気象変動が大きく、収量・品質が変動しやすいことから、土壌診断に基づいた施肥や堆肥の施用を行い、地力を維持・向上させ、気象変動に強い安定的な稲WCS生産を進める。

直播栽培は省力・低コスト効果の高い栽培法である一方、初期生育の安定確保や雑草防除に注意が必要である。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。食味に関係なく地上部全体の収量向上を図るが、飼料の品質確保と作業の効率化ため、倒伏しないよう注意が必要である。稲WCSを利用する畜産農家で生産された家畜ふんたい肥等の利用により地力窒素の向上に努めると共に、地域内の有機性資源循環を図ることが望ましい。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類の耕種的防除を励行する。

除草では除草剤を節減するため以下の除草技術を実施する。また、種子の加温処理や適期播種などにより出芽・苗立ちを安定させるとともに、除草剤は適期に使用し雑草の発生を抑える。主食用に供する場合に比べ、使用できる薬剤の種類や使用時期が限られているため注意する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 4.8kg/10a以下* 6.4kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から播種までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○農薬は稲発酵粗飼料生産・給与マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*コシヒカリに準ずる品種等、**ひとめぼれに準ずる品種等

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

カ 稲WCS（主食用品種・湛水直播栽培・山間・山沿い地域）

本地域は生育初期の気温・水温が低く、生育量の確保が困難で、収量が低下しやすい地域である。さらに、病害虫の発生も多く、品質が低下しやすいことから、土壌診断に基づいた施肥や堆肥の施用を行い、地力を維持・向上させ、気象変動に強い安定的な稲WCS生産を進める。

直播栽培は省力・低コスト効果の高い栽培法である一方、初期生育の安定確保や雑草防除に注意が必要である。

施肥は、省力化を図るため基肥に重点をおいて施用することを基本とする。食味に関係なく地上部全体の収量向上を図るが、飼料の品質確保と作業の効率化ため、倒伏しないよう注意が必要である。稲WCSを利用する畜産農家で生産された家畜ふんたい肥等の利用により地力窒素の向上に努めると共に、地域内の有機性資源循環を図ることが望ましい。

害虫防除では、畦畔の草刈りによるカメムシ類の耕種的防除を励行する。

除草では除草剤を節減するため以下の除草技術を実施する。また、種子の加温処理や適期播種などにより出芽・苗立ちを安定させるとともに、除草剤は適期に使用し雑草の発生を抑える。主食用に供する場合に比べ、使用できる薬剤の種類や使用時期が限られているため注意する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	<ul style="list-style-type: none"> ○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。 ○麦作付け後の麦稈を、直ちに規定量の土壌改良資材等とともにすき込み、たい肥化する。 	たい肥 1 t/10a
化学肥料低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥（側条施肥等）を行う。 	化学肥料窒素 成分量 7.2kg/10a以下* 9.6kg/10a以下**
化学農薬低減技術	<ul style="list-style-type: none"> ○除草用動物を利用する。 ○機械除草を行う。（カメムシ等の害虫防除のための畦畔などの除草を含む。） ○温湯種子消毒を行う。 	化学農薬使用 回数（合計） 8回以内
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ○土壌診断に基づき、たい肥の施用量や施肥量を調整する。 ○たい肥の施用量は、稲わらたい肥を前提とした目安であり、家畜ふんたい肥等を用いる場合や、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。 ○代かき後から播種までの期間を出来るだけ短くし、除草剤の効率的利用による雑草の発生を抑える。 ○水田の漏水を防止し除草剤の効果を高める。 ○必要に応じて珪酸資材を補給する。 ○農薬は稲発酵粗飼料生産・給与マニュアルに基づいて使用する。 	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 使用の目安の欄の*、**については、以下のとおり。

*ひとめぼれに準ずる品種等、**まいひめに準ずる品種等

注3) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用（経歴）ごとに合計した数である。

(3) 飼料用トウモロコシ

良質なたい肥等有機質資材の適量施用により土づくりを行うとともに、局所施肥、肥効調整型肥料・有機質肥料の施用により化学肥料施用量の低減を図る。家畜ふんの過剰な施用は、未吸収窒素による環境負荷、土壤養分塩基バランスの悪化、飼料作物中の硝酸態窒素含量の増加を招く危険性があるので、注意する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。	たい肥 4 t/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥等を行う。	化学肥料窒素 成分量 16kg/10a以下
化学農薬低減技術	○抵抗性品種栽培 ○リビングマルチ栽培 ○機械除草を行う。	化学農薬使用 回数(合計) 2回以内
その他の留意事項	○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。

(4) ソルガム

良質なたい肥等有機質資材の適量施用により土づくりを行うとともに、局所施肥、肥効調整型肥料・有機質肥料の施用により化学肥料施用量の低減を図る。家畜ふんの過剰な施用は、未吸収窒素による環境負荷、土壌養分塩基バランスの悪化、飼料作物中の硝酸態窒素含量の増加を招く危険性があるので、注意する。

除草では、除草剤の使用を節減するため以下の除草技術を実施する。

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安 (作期あたり)
たい肥等施用技術	○完熟たい肥を施用する。 ○緑肥作物を栽培・施用する。	たい肥 4 t/10a
化学肥料低減技術	○肥効調節型肥料を施用する。 ○有機質肥料を施用する。 ○局所施肥等を行う。	化学肥料窒素 成分量 16kg/10a以下
化学農薬低減技術	○抵抗性品種栽培 ○リビングマルチ栽培 ○機械除草を行う。	化学農薬使用 回数(合計) 2回以内
その他の留意事項	○土壌診断結果に基づいて施肥量やたい肥等の施用量を調整する。 ○たい肥の施用量は、使用の目安を超えるたい肥を施用する場合は、別表を参考に行う。なお、鶏ふん等たい肥を使用する際は、C/N比がおおむね10以上であることを確認すること。	

注1) 化学肥料を使用の目安以上に節減する場合は、有機質肥料を使用する。

注2) 化学農薬使用回数とは単なる農薬の使用回数ではなく、散布した薬液等に含まれる有効成分の数を施用(経歴)ごとに合計した数である。